

日銀いよ金融教室 第124回（最終回）：「アフターコロナ」

2020年12月8日（火）（愛媛新聞E4編集係）

今年は新型コロナウイルス感染症で、私たちの暮らしや仕事は大きな影響を受けました。ウィズコロナで忍耐の日々が続いていますが、いずれワクチンの普及でひとまず安心できる日はやってきます。ただ、完全克服は難しく、感染対策もある程度残るでしょう。そうしたアフターコロナとは、どんな世界でしょうか。

まず、ビフォーコロナでのやりものを思い出してみましょ。五輪やラグビーにマラソン、カウントダウンやハロウィーン、会いに行けるアイドルのイベント、インバウンド（訪日外国人客）や爆買い…。これらはあるテーマの下、人が集まり接触し、実体験することで、知らない人も含むみんなで気持ちを分かち合い、盛り上がるものですが、ウィズコロナでは厳しい状況。この種類を「ライブ型」とします。

一方、ネット販売やスマホ決済、自転車シェアに外食デリバリー、SNS（会員制交流サイト）投稿、「○○映え」など。これらは、人が集まらず接触しなくても、より便利に、より楽しく過ごせるようにするもので、ウィズコロナでも大人気。この種類を「技術型」とします。

次に、アフターコロナでのやりものを想像してみましょ。ライブ型は、生で得られる感動を共感し合いたいという人々の根源的な欲求が、時流に合わせて噴き出したもの。アフターコロナでは、感染対策を取り、オンライン化など技術型の要素を取り入れつつも、人々の欲求を満たすものが生き残り、また新たに生まれ、発展していくのではないのでしょうか。



技術型は、テクノロジーやノウハウの進化が生み出した新たなサービスやライフスタイル。ウィズコロナでも、在宅勤務やオンライン飲み会などさらに進化しています。一方、従来のものは劣勢となりますが、その良さを捨てがたい人もいるでしょう。そのため、技術型では次々と新たなものが提案されながらも、従来のものと競争しつつ、共存するのではないのでしょうか。

日銀にもライブ型サービスがあります。例えば本店本館見学。ウィズコロナの中、オンライン化を進め、誰でもいつでもどこでも見学コースを見られるようにする一方、感染対策の上、実地見学も人数限定で実施しています。百聞は一見にしかず、実物を見てこそ得られるものもあるので、先行きはオンライン・コンテンツを充実させながらも、より多くの方に楽しんでもらえる実地見学を目指すでしょう。

技術型サービスは、例えば中央銀行デジタル通貨。先月も書いたとおり、来年度から実証段階に入ります。現時点で発行計画はありませんが、仮に発行されても、慣れ親しんだ現金と共存するでしょう。

ためてきた欲求不満が解き放たれるアフターコロナ。ライブ型はおのこの間で、技術型は新旧の間で、一段と熾烈（しれつ）な競争も起こるでしょう。その日に向け、暮らしの面では正しい選択のため、仕事の面では勝ち残りのため、今から準備が必要です。

こうした想像の当否はともかく、来年こそ、アフターコロナの世界となりますように。
（日本銀行松山支店長・小山浩史）

※2013年6月から歴代の日本銀行松山支店長が執筆した金融経済コラム「日銀いよ金融教室」は今回で終了となります。